



民博東京講演会

「世界の結婚事情——セネガル、中国、フランスから考える」

のばやし あつし
野林 厚志

民博 研究戦略センター

本館は2000年から毎年秋に日本経済新聞社と共催で東京講演会を開催している。11回目を迎えた今回は、人類学や民族学において古くから大切なテーマとなってきた結婚をとりあげた。

結婚をめぐる人類学の議論

世界にはさまざまな結婚の形態があり、配偶者選びや結婚をおして築かれる親族関係や社会関係は非常に多種多様であることが知られている。人類学者はこうした社会関係の基盤となる結婚とそれに関連した人間関係について調査、研究をおこない、さまざまな議論を重ねてきた。とりわけ一九五〇～六〇年代にかけて、兄弟姉妹の子のあいだでおこなわれるいわゆるイトコ婚をめぐる、社会の構造の存続という観点から説明した著名な人類学者であるレヴィ・ストロースと、個人の感情や嗜好といった観点から解釈したハーバード大学の社会学者であったホーマンズとのあいだで熱い議論が戦わされたのはそれらの例のひとつである。配偶者が死んだ場合、残された片方の配偶者と死んだ配偶者の兄弟姉妹とのあいだでおこなわれるレヴィレイト婚（もしくはソロレイト婚）、未婚のまま死んだ女性と男性とが婚姻関係をもつ位牌婚など、非常に多種多様な結婚のありかたを人類学者たちはこぞって記述、分析してきた。

結婚の再認識

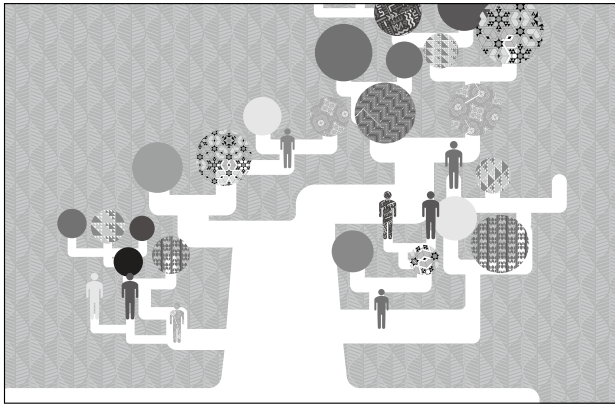
しかしながら、人類学者の関心は民族誌記述の方法論的な問題や、グローバル化の影響、現地で生じている開発や経済格差にかかわる現実的な問題に関心を強めていき、



中国福建省の漁村の若い夫婦。「不落夫家」の慣習は「長住娘家」ともよばれる。夫婦は結婚後、第一子誕生までは同居しないことが多い(提供・田村克己)

三つの切り口から

今回の講演会では、こうした背景のもと、世代や人口、子の存在、制度という三つの切り口から結婚を考えた。民博の三島准教授はセネガルでおこなわれている一夫多妻制のからくりを世代をこえた婚姻関係による結婚人口の調整であることを解き明かした。事情により塚田教授に代わって急きょ登壇した田村教授は自身の調査地である福建省漢族や、塚田教授の調査してきたチワン族の、子の出生をもって正式な夫婦関係となる「不落夫家」という慣習を具体的な調査事例をもとに解説した。東北大学法学



家系図を示す絵(研究フォーラムのポスターより)。パオバブの木をイメージしており、模様の一部にアフリカの布のデザインが使われている。©遊文舎

部の水野紀子教授には、家族法の成立過程とその概念を中心に、日本とフランスとのあいだの結婚観や社会観の相違について講演いただいた。時間的な制約から、研究のほんの一端についてだけしか紹介していただけだったが、それぞれのも味を活かした講演は「晩婚化」や「婚活」といったマスコミがとりあげがちな表現だけでは理解できない、結婚の歴史性や政治性、経済性や社会性を強く意識させる内容であった。今回の講演会の聴衆は若い世代の割合が高く、「今、ここで」という人類学ならではのありかたを、当事者意識をもった人たちに少なからず伝えることができたのではなかろうか。

梅棹忠夫の予見

パネルディスカッションでは、七月に他界した梅棹忠夫初代館長が約五〇年前に「婦人公論」によせた「妻無用論」をてがかりに、講演者に講演内容を今一度ふりかえってもらった。「今後の結婚生活というのは、社会的に同質化した男と女との共同生活、というようなところに、しだいに接近してゆくのではないだろうか。」レヴィ・ストロースらが慣習的な結婚慣習のことを議論の中心にしていた同時代に、すでに将来の結婚というものを予見していた「妻無用論」のなかの梅棹先生のこのことばは

結婚というテーマは研究上の主要な地位から徐々に遠ざかっていった。民博でも婚装、婚資品といった標本資料は収集されたり展示されたりしているが、それらを調査の中心に据える研究者はそれほど多くはない。一方で、この数年、「家」、「ライフデザイン」、「生き方」といったキーワードが民博でおこなわれる研究の課題名に登場する機会が増えてきた。こうしたキーワードには結婚という課題が密接に関係する。とりわけ、少子高齢化、晩婚化が進む日本において、結婚はこれからの社会がどのような方向に進んでいくのかを占う重要なテーマとして再認識する必要があるだろう。

慧眼であろう。個別的な社会現象に限定するのではなく、将来を見とおした文明的な視点が結婚という人類学上の課題にも与えられていたのである。

晩婚化や平均初婚年齢の男女差の縮小、生涯独身者の増加、正式な結婚の形をとらず「パートナー」とよびあうカップルが増加していることなど、結婚をめぐるさまざまな変化は二一世紀の家族像や社会関係、社会そのもののありかた、さらには地域や国家、そして地球全体の人口構成にも少なからぬ影響を与えていくことはいまでもない。今回の講演会は結婚というテーマが人類学における大切なテーマでありつづけることを確信させるよい機会となったのではなかろうか。

【講演会情報】

二〇一〇年一〇月二九日に東京都千代田区の日経ホールにおいて公開講演会「世界の結婚事情——セネガル、中国、フランスから考える」を開催。講演は本館三島准教授「男女フランスからみた結婚事情」セネガルの女性たちと大家族の戦略」ならびに田村克己教授「子の出生の意味するもの——中国社(チワン)族の婚姻習俗「不落夫家」婚をめぐる」東北大学法学部水野紀子教授「結婚の制度を比較する——日本とフランスの例を中心」。